
常闇の魔女

空色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

常闇の魔女

【Nコード】

N1257BA

【作者名】

空色

【あらすじ】

『今思い返すならば　もう、あの時すでに、自分は囚われていたのだ。』

その身に、金色を頂く王と黒を宿す女。

彼らの出会いから始まる、永きに渡る物語。

短編「ある始まりの物語」を連載としました。マイページ更新となりますが、よろしくお願ひします。

その日、彼女が王都に出かけたのは本当に偶然のことだった。普段、奥深い森に住む彼女は、もっぱら趣味である薬作りに精魂を費やしていた。

薬を作るのは楽しいし、なにより森にはたくさんの薬草が生えていたので原料には困らない。

実り豊かな森であったので、家の前のささやかな畑と森からの恵みで暮らしは十分潤っていた。

時折、作成した薬を売り現金を得て、休暇と称する買い物を楽しむ。そんな慎ましい日々を、彼女は何よりも愛していた。

底冷えするような寒さが和らぎ、日差しに暖かさが混じるようになっていたある日の早朝。

いつも通り森の中を散策していた彼女は、この季節にしては珍しい薬草が生えているのを見つけ、喜び勇んで薬の作成に取り掛かった。件の薬草は鎮痛効果が高く、そのまま噛んでも、乾燥させて粉にしても使える優秀な素材だった。

鎮痛・消炎作用に優れた軟膏を作り終え、満足げな息を吐いた彼女は、ふとあることを思い出した。

日ごろ懇意にしている薬屋が、そういえばこの類の薬を欲しがっていたのだ。

彼の店はそれなりに繁盛し、昨今、小さいながら王都に店を構えるに至ったと連絡をもらっていた。
ならば、祝いのついでに少し商売でもしてこようかと思ひ立ち、作成したばかりの薬のほかに、いくつか作り溜めておいたものを手に家を出た。

久しぶりに訪れた王都は、相も変わらず華やかで活気に満ちていた。王城へと続くメイン通りはたくさんの人と出店で溢れ、あちこちから客引きの声が威勢よく響いている。

気まぐれに店を冷やかしながら、帰りに新鮮な果物でも買って帰ろうかと考えていたとき、彼女は視線の先に人だかりを見つけた。その人垣はどうやら、城の門前に集まっているようだった。ちよつとした野次馬根性で人垣に近づき、たくさんの頭越しに首を伸ばしてみると、どうやら門前の立派なたて看板が人だかりの原因であるらしかった。

あまりにも遠く、残念ながら看板の内容を読むことができなかった彼女は、目の前に立つ恰幅の良い女性に何事が起きたのかを尋ねた。

「すごい人だかりですけど、城で何かあったんでしょうか？」

「ああ、どうやら短期求人のようにだよ。急に人手が必要になって、

下働きを求めてるって話さ。」

「へえ、それは珍しい。」

普通、城での求人をおののような形で募集することは滅多にない。

いくら下働きといえど、出自のしつかりとした人間を、城内の紹介で雇い入れる程度だ。

「なんでも、今年は春の花祭りとお園祭を合同でやるらしくってね。

その準備に人手が割かれるから、城でも働き手が足りないんだらう

ね。」

「なるほど、じゃあ、今年の祭りはいつそう華やかになりそうです

ね。」

花祭りとは春の訪れを祝う祭りであり、お園祭は野菜や果物の豊作を願う祭りである。

メイン通りを軍の歩兵隊や騎馬隊が練り歩き、各所で踊り子が華やかな舞を披露し、道行く人があちらこちらで色とりどりの花弁をまく。

王城の門が開放され、美酒が振舞われたあと、午後一番の鐘が鳴ると同時に王を始めとする王族が都を一望するバルコニーに顔を見せる。

国の頂に立つ貴人を垣間見るといふ至上の幸福に人々は酔いしれ、また、同時に今年一年の豊穰を願うのだ。

王都の民だけでなく、他の町や村、ひいては他国の観光客で街は溢れかえるのだらう。

とても華やぐ情景ではあるのだが、あまり人ごみの得意でない彼女

は、その光景を想像し僅かに苦笑した。
物思いに耽っていた彼女は、急にその手を引かれ、思わずたたらを踏んだ。

顔を上げると、城門が開かれ兵士の号令に従って人々が城内へと歩き始めていたところだった。

「なにポーっとしてるんだい、乗り遅れちまうよ。ほら、おいでな。」

「え、あの・・・、ちよつと・・・!」

自分はけして求人に応じた訳ではなく、ただの野次馬であったのだが、それを伝える間もなく人波にもまれる。

あれよあれよという間に簡単な面接をされ、ようやくその旨を伝えられた時には、洗濯場の下女となることが決まってしまうていた。

「なんだい、あたしはてつきり出稼ぎに来てるとばかり思っちゃまって。悪いことをしたねえ。」

「あ、いえ。良いんです。早いうちに言わなかった私も悪いんですし。」

「まあ、御園祭が終わる数ヶ月の話さ。城で働いたつても、地元に戻れば箔がつくさね。」

「ええ、まあ、・・・そうですね。」

地元に戻っても、周りにいるのは野生動物のみであるが、彼女は曖昧な笑みを浮かべる。

兵士達の食堂に勤めることになった女性と別れ、洗濯場に案内され

る女達の最後尾を歩きながら、彼女は小さくため息をついた。知己の祝いとささやかな商売をするはずが、とんだ事になってしまった。

まあ、決まってしまったものは仕方がないし、今更辞めると言出し辛いのも事実である。

数ヶ月をこの王城で勤めたら、暫らく王都にくるのは控えようと決心し、彼女は歩みを進めた。

臨時雇用者達に、始めに指導されたのは城内での作法や注意事項であつた。

王城は主に4つの区域に分かれており、城門に近い南側は外から運ばれてきた荷の上げ下ろし等、身分の低いものが働いていることが多い。

東側は後宮、西側は成人した王族の生活の場であり、一番奥に位置する北側がこの国を動かす中枢となっている。

そのように城内は明確に区分けされており、それぞれの区域前には立派な門と、兵士の守りがつき簡単に行き来はできないような仕組みとなっていた。

よって、基本的に下働きである自分達が、高貴な身分の方々に会うことは滅多にないが、皆無と言つわけではない。

城では身につけるものの色で位や担当地区を識別しているらしく、

騎士であれば鎧、魔法士であればローブ、官吏であれば衣のそれぞれ一部分の色が異なってくるのだそうだ。

女官は襟元や袖の刺繍や色で分けられており、南地区の下女である自分達は、灰色が多く使用された服であり、襟や袖は無地となる。また、高位の官吏や女官に遭遇したときは頭を下げ、過ぎ去るまで決してあげてはならないこと等を簡単に説明された。

その後、洗濯する際に気をつけること、例えば布の質、色ごとに分別し洗うことや、洗濯に出された部署ごとに洗い物をする事。

日干しをして良い布や、日陰干しをしないと傷んでしまう物など、細かに注意を受けた。

とはいえ、臨時雇用の身の上で、さらには年若い娘に分類される彼女は、もっぱら洗濯物の運搬を任されるようだった。

あらかた説明が終わる頃には、夕餉の時刻が迫っており、一同は下人用の食堂へ移動した。

それなりの広さを持つ食堂では、数百人の下人が夕餉をかき込んでいた。

配膳を待つ列の最後尾に並び、盆を手にして並ぶ。

雑穀の混じった少し硬めのパンに、クルトと根菜のサラダ、鶏肉の燻製が2切れ、スープが本日の夕食だった。

木で作られた長い机の端に腰掛け、彼女は汁物を啜った。

具は少量の青菜と豆のみではあったが、それなりに出汁がきいているようで、冷えた体には嬉しい暖かさだ。

小さく口元を綻ばせていると、隣に数人の少女達が集まって腰を下ろした。

どうやら、同じ村から出稼ぎにきているらしく、自分達が配属された部署について気安い様子で話をしていた。

見知った者もいない彼女は、少女達の話の聞くともしに聞きながら燻製を口に運ぶ。

やや燻しすぎの気もするが、臭みがなく、その点では彼女の好みであった。

「そういえば、あたし、遠くからだけど、とても格好良い兵隊さんを見たのわ!」

「やだ、羨ましい。いーな、あたしも兵隊さんの部屋掃除になれば良かったのに。」

「あたしだって、すっごく遠くからだけど、後宮のお姫様を見たんだから!とても綺麗な赤毛だったわ。」

「じゃあ、魔力持ちの姫様だったのね。赤髪ってどんなものなのかしら、一度近くで見たいなあ。」

「それを言ったら、やっぱり金の髪じゃない?日の光を受けると、きらきら輝くって話よ。」

「きつと、あたし達みたいなの下賤なものが見たら目が瞑れちゃうわ!でも、一度でいいからやっぱり見てみたいね。」

おしゃべりに花を咲かせる少女達に、彼女は思わず笑みを浮かべる。そんな彼女達は全員、黒髪、黒目という色合いだ。

というか、自分を含めこの食堂に集まる下人たちは殆どが同じく黒の髪と瞳を持っている。

逆に魔力を持つ者は、髪や瞳に色を持って産まれてくる。

火の属性であれば赤、水の属性であれば青というように、色合いは様々だ。

その中で、もっとも最高峰に位置する色が黄金色であり、それを有するのは少数の王族のみであった。

金は全ての属性を持つ、精霊に愛された色である。

現在、至上の色を身に纏うのは、現国王陛下とその第一王子のみであり、庶民がその高貴な色を目にすることは殆どない。

だからこそ、年に数回王族がバルコニーで一同に会する姿は格別である、とは知己の薬屋の談だ。

（まあ、私には縁のない話だけれど。）

最後の燻製を口に放り込み、彼女はそっと席を立った。

本来なら、自分はあるの穏やかな森の奥から出てくるはずのない者だったのだ。

それが何のいたずらか、就職先を求めていると勘違いされ、今に至っているだけ。

数ヶ月のお勤めがすめば、もとの静かな暮らしに戻ることができ。城で過ごすであろう日々が、どうか平穏であるようにと、彼女はそればかりを祈るのだった。

彼女が臨時の働き手として城に就職してから、何事もなく幾日かの時が流れた。

洗濯場の仕事にも慣れ、同室の仕事仲間ともそれなりに打ち解けていた。

「じゃあ、今日はこっちの籠をもって行こうかな。」

「なら、私はこちらを担当しますね。」

「あ、これ兵舎に持っていくやつじゃない！今日はあたしが当たりね。」

南門近くの中庭で日干しをしていた洗濯物を取り込み、植物の蔓で編まれた籠に放り込む。

あとは取り込んだ衣類を担当場所に届け、代わりに汚れ物を洗濯場に運んで、自分達の仕事は終わりだ。

届けられた衣類を仕分けし畳んだり、汚れた衣類を熱湯につける作業はまた別の人間の分担になる。

昼餉の約束をした後、両手でなんとか抱えることのできる籠を持ち

上げ、中庭からそれぞれ担当する棟に向かって歩きだした。

彼女が本日担当しているのは、南の地区の東門近くにある後宮女官の詰め所である。

とはいっても、部屋付きではない下級の女官達であるので、何人も
の女官が共同で寝起きをしているような場所だ。

この時間は後宮の掃除や、昼餉の準備に忙しく立ち回っているらしく、もぬけの殻であるのが常だった。

段々と暖かさを増してくる日の光に、彼女はそつと目を細める。

今頃、自宅付近では春を告げる草が芽吹き、様々な種類の薬草が顔をのぞかせているだろう。

ささやかな畑は手入れをする者がいないため、残念なことになってしまっているかもしれないが、仕方のないことである。

王都を離れるときは、夏野菜の苗と、都でしか手に入らない珍しい薬草の種でも買って帰ろう。

それらを畑に植える楽しみを思うと、自然と彼女の口元に笑みが広がった。

取り留めなく考え事をしていたせいか、彼女が東側の喧騒に気付いたのは東門まであと少しという距離になってからだった。

後宮特有の空気というか、どんなに忙しい時間帯であっても、東側は楚々とした雰囲気であることが多かったのだが、今日はどこことなく緊張を孕んでいる様だった。

遠くの方から、誰かを呼び、探し回るような音が漏れ聞こえてきた。南の人間である自分が巻き込まれることはないだろうが、面倒事には近づかないのが一番である。

さっさと仕事を終えて退散しようと、止めていた歩みを再開した彼女は、微かな嗚咽を聞いた気がした。

耳を澄ますと、それはどうやら頭上から聞こえてくるらしく、そつと上を仰ぎ見る。

何だかとても嫌な予感がしなくてもないが、もし彼女の予感が当たっているなら放っておく事もできないだろう。

深いため息をつき、洗濯籠を木の根元に置いて、彼女はその幹に両手を伸ばした。

樹の中ごろにある太くしつかりとした枝に手を伸ばし、両腕の力で体を持ち上げた先、彼女の目に飛び込んできたのは眩いばかりの黄金だった。

日の光を受け、風が通り過ぎる度にキラキラと反射するその色に、彼女は思わず天を仰いだ。

今世に、この色を宿すのは二人しかない。

一人はこの国の頂点に座す王であり、残る人物はただ一人。

間違いであつて欲しいと願いながら、殆ど確信を持って彼女は己のひざに顔を埋めた子供に囁く。

「もしや・・・王子殿下でございますか？」

びくりと肩を震わせ、彼は勢いよく顔を上げる。

その拍子に、新緑を思わせる翠の瞳からぼろりと涙が零れ落ちた。

表情を変えずに、彼女は内心で果てしなく深いため息をついた。

今現在、後宮の人々が血相を変えて探し回り、名を呼ばわっていた人物が頭に浮かんだ。

樹上で一人嗚咽を漏らしていた彼こそが、フェヴィリウスの第一王子、ラズフィス・ユディア・フェヴィリウスその人であった。

こぼれんばかりに瞳を見開いた後、第一王子はおもむろに服の袖で目元を擦り始めた。

彼女は慌てて懐を探り、持っていたハンカチを差し出す。

赤くなつてはいけないと思つたのだが、よくよく考えれば庶民の持ち物である布より、王族の衣服の方が余程柔らかな物を使用しているはずだ。

まあ、その豪華な生地を汚さないためと考えれば、いくらか理に適うはずだ。

「殿下、よろしければこちらをお使ください。」

彼は揺れる瞳でじつとこちらを見つめた後、彼女からハンカチを受け取り顔に押し付けた。

漏れる嗚咽を飲み込みながら、どうにか感情を抑えようと必死に抗っているようだった。

小さく震える肩を見下ろしながら、彼女はじつと彼の激情が治まるのを待った。

御年、7歳になるはずの彼の王子殿下は、ちゃんと食事を摂っているのかと心配になるくらいには線の細い少年だった。

鼻筋がすつきりとしていて、整った顔立ちの少年は、見ようによっ

ては女の子にさえ見えそうだ。

彼が落ち着くのを待ちながら、彼女はその後にごうするべきかと頭を悩ませる。

なぜ王子殿下が泣いているのか、どうやって東側を抜け出してきたのか、そもそも子供が抜け出せてしまう後宮の警備はどうなっているのかなど疑問は尽きない。

しかし、正直に言ってもらもろの疑問はひとまずどうでも良い。

彼女にとって目下の悩みは、王子殿下をどうやって穩便に後宮へ届けるかということである。

一番良いのは、来た道を殿下自らお帰りいただくことだが、この泣きぶりを見るとしばらくは無理かもしれない。

王族をこのまま放置しておくわけにもいかず、彼女は己の昼餉を諦め、約束を反故にすることを心の中で同僚達に謝った。

嗚咽と共に僅かに揺れる頭を見るともなしに見ていたが、一つ下の枝に足を置き彼に背を向けて王都を見下ろした。

そういえば王族をこんな間近で、しかも泣いている姿を直視するのは不敬にあたる可能性もある。

こんなことで縛り首はご遠慮願いたいので、できることなら王都永久追放とかにしてくれないだろうか。

遠い目でそんなことを考えていた彼女の耳は、背後から届く小さく擦れた声を拾い上げた。

不敬罪の文字が頭の中をちらついていたが、泣いている子供を放っておくのは気が引ける。

彼女はほんの少し項垂れてから、気を取り直して彼に向き直り声をかけた。

「殿下、いかがなさいましたか？」

「・・・なぜ・・・お前は・・・泣くなと言わぬのだ。」

消え入りそうな声で呟かれた言葉に、彼女は暫し沈黙した。

なぜと問われても返す答えが無かったというのもあるが、彼の言葉に僅かに衝撃を受けていたのだ。

彼女の知り合いに、今年の夏に9歳になる息子がいる。

彼はよく遊び、よく笑うが、逆に気に入らないことがあると、癪癪を起こしてはよく泣いた。

そもそも、子供とは感情の起伏が激しく、よく泣くものである。

そう、それが普通の子供であるならば、だ。

「皆、王の子であるならば感情的になつてはならぬと言う。それに、余は王子だ。妹達のように泣くのは恥ずかしいことなのだろう。」

己の膝を抱き、身を守るように小さくなっている子供。

大声を上げて泣くことすらできず、こんな風に隠れて感情を吐き出すことしかできない。

そんな姿に、こみ上げてきた気持ちは何であったのだろうか。

それは単なる同情であったのかもしれないし、あるいは彼にかつての自分を重ねたのかもしれない。

つらい、こわい、くるしい、本当は大声で叫びながら泣きたかった。でも、助けを求める権利は、自分にはなかったから。

必死で押し殺して、いつしか諦めることを知った。

あんな風に血を吐くような苦しみを、目の前の幼い存在に背負って欲しくなかった。

たとえそれが、王の子であろうとも。

だから、思わず声をかけた。

平穩を望むのならば、けして関わってはならないと理解しながら。

「下賤の身である私に、王族方のお心は分かりかねますが、男であるから泣いてはならぬと言うことはないかと存じます。」

かつての記憶に顔を強張らせていた自覚があるため、できうる限りの気力でもって彼女は笑みをつくる。

表情が引き攣ってはいないかと危惧したが、見開かれた新緑に映る自分は存外穏やかな顔をしていた。

その事実にも力を得て、彼女は幼い王族に向き直った。

「少なくとも、私の知人には成人した男でありながらよく泣く者がおりますが、恥ずかしい奴と思つたことはございません。」

彼は大泣きした後、実にすつきりとしていましたし、その時どうすれば良かったか、次に何をすれば良いのかを考えられる者でしたから。」

もう会わなくなつて久しい彼の人を思い出す。

彼は優に2メートルを超すのではないかと思えるほどの大男でありながら、とても感情豊かな男であった。

悲しいことがあれば人目もはばからず泣き、感動しては泣き、悔しさに耐え切れず涙を流し、他人に感情移入しては声を上げて泣いた。だが次の日にはからりと笑い、前を向いて歩いていけるだけの強さを持っていた。

夏風のように爽やかで、当時鬱々としていた自分にとっては、実に眩しい男だった。

「私は泣くことが悪いこととは思いません。泣いた後、良く考え、確実に歩んでいけるのならそれもまた、一つの成長であると考えるからです。」

「・・・余はその者のようになれるだろうか。」

「殿下ご自身が願ひ、努力されるのであれば。」

果たして自分がそうあれたかと問われれば、首を傾げざるを得ない。それでも、この太陽の光を宿す少年が、どうか暗闇に飲み込まれることがないように。

ただ、願う。

第一王子は膝の上で握り締めていた両手を解き、俯いてしばらく動かなかった。

小さく鼻を噉り、次に顔を上げた。

少し赤くなっただけのもの、その目に涙は見当たらなかった。そのことに何故だかほっとして、彼女は自然と己の唇が弧を描くのを感じた。

「さあ、そろそろ東へお戻りください。きっと、皆が御身を案じて

おります。」

彼女は降りやすいようにと、足場に使っていた枝を移動し王子殿下を促す。

一つ頷くと、彼はそれほど危なげなく幹を利用して降りてくる。

それを確認してから、彼女は枝を伝って先に降りて大樹を見上げた。

何かあればすぐに対処できるようにと見守っていたが、程なくして王子殿下は慎重に地に足をつける。

衣服についた木屑を払った王子は、はにかんだ様な笑みを浮かべた。思わず微笑み返しそうになった彼女は、雇用の折に説明された作法を思い出し慌てて平伏する。

今更のことであるが、それに加えて王族を見下ろしたとあっては、無礼にもほどがあるだろう。

「なぜそのようなことをする。顔を上げよ。」

「恐れ多つございます。」

頭を上げない彼女に、王子殿下は不満げな雰囲気をかもし出しているようだった。

暫しの沈黙の後、彼は小さくため息をつく。

「ならば、名を。お前の名を教えてください。それくらいなら良いだろう。」

「・・・ユーリ、と申します。」

「ユーリか、良い名だな。」

彼女は、幾分か和らいだ王子の声色に心の中で安堵する。気づかれないようにそっと視線を上げた彼女は、その光景に息を呑んだ。

精霊の寵愛を受ける、黄金を頂く者は光そのものである、とは誰が言った言葉であつたらうか。

今ならば、心の底から同意することができるだろう。

彼の顔に浮かぶのは、満面の笑みであつた。

まるで、とても良いモノをもらったとでもいうように、頬を紅潮させている。

太陽の光を受け、彼は眩いばかりに輝いていた。

それが、後に28代フェヴィリウスの国王となる、ラズフィスと彼女の出会いであつた。

ユーリ達は午前中の仕事を終わらせ、人でごった返す食堂に立ち寄った。

ちよつど昼の混雑時に当たってしまったようで、たくさんあるはずの席は殆ど埋まってしまっている。

全員が集まって食べるのは無理そうだと判断し、それぞれ空いている席を探しに散らばった。

精一杯背伸びをして、食堂の奥まで見渡してみたものの、あいにく座れそうな場所は見当たらない。

仕方がないため息をつき、ユーリは厨房の入り口に近づいて声を上げる。

「すみません、外で食べるので食材を分けてもらえますか？」

「あいよ、ちよつとまってな。」

厨房の料理人に、パンと葉物野菜、ベーコンの切れ端を分けてもらう。

皮の水筒にミルクを注いでもらって、厨房を出て行くこうとすると後ろから呼び止められた。

大鍋の前で汗をかいていた、恰幅の良い壮年の料理人が小袋を差し出してくる。

中を覗くと、小ぶりなレカシユの実が3つ入っていた。

「今日はいつが安く手に入ったらしくてな、南にもちと分けてもらえたのさ。」

「え・・・、でも、昼のメニューには入ってないですよね？」

分けてもらえたと言っても、下働き用の食堂では1日何千食もの膳がだされるのだ。

その全てにデザートをそえられるほど、レカシユの実が溢れているとは到底考えられない。

困惑気味に料理人に目をやると、彼は悪戯をする子供のようににやりと笑った。

「食堂おん出されちまうお嬢ちゃんに、特別にやるよ。」

「嬉しいです、ありがとう。」

パンの間に野菜やベーコンを挟んで、ナプキンに包むと、ユーリは今度こそ食堂を後にした。

東門付近まで来ると、南地区の喧騒とは一転し辺りは静まり返っている。

空に向かって枝を伸ばす大樹まで駆けて来た彼女は、昼餉と水筒を懐に入れ、幹に手を伸ばす。

するすると登った先、もはや定位置となった枝までたどり着くと、詰めていた息を吐いた。

少し火照った顔に心地よい風は、もう春の気配を含んでいる。

風に髪を遊ばせながら、眼下に広がる光景にユーリは目を細めた。

賑わう街並みは祭りに向けて準備が進められ、通りに面した建物には造花で作られた花輪が飾られている。

あれが祭りの前夜から後夜祭までの3日間、華やかな本物の花に変わるのだ。

そして、メイン通りにはたくさんの商店が軒をつらね、商人は今年の春に取れた作物を手で商売に精を出す。

今は屋台の骨組みがまばらにあるだけだが、祭り当日には数倍に増えていることだろう。

活気付く街並みの先には、少しずつ緑萌ゆるトゥリジール山がそびえている。

あの山の向こうに、自分の住む森があるのかと思うと感慨も一入だ。
森から出てきて、まだ一ヶ月にも満たないと言うのに、とても懐かしい気持ちになるのは何故だろう。

偶然見つけた場所ではあるが、自分の住みなれた森に思いを馳せる事のできるこの大樹が、彼女にとってこの王城で一番のお気に入りとなった。

大きな枝に腰を下ろし、ユーリは持ってきた昼餉を膝の上で広げた。走ってきたせいか、少し形が崩れてしまっていたが、味に問題はな
いだろう。

はみ出ってしまった野菜を押し戻してから、彼女はパンの端に齧り付
いた。

ベーコンの香ばしい味と、瑞々しい野菜の甘味が口の中に広がり、
ユーリは思わず顔を綻ばせた。

口の端についたソースを拭こうとポケットに手を伸ばし、ふと思
い出す。

そういえば、ハンカチは第一王子に貸したまま、返してもらうのを
忘れていた。

仕方なく、ナプキンの端で口を拭いて、パンを流し込むためにミル
クを口にする。

あの一件以来、王子殿下とは会っていない。

そもそも、ここは南地区であって、王族が気軽にいい場所では
ないのだ。

恐れていたようなお咎めも、事件もなく、ユーリは平穩に日々を過
ごすことができている。

だから、正直油断していたのも確かだ。

「ユーリ、また会えたな！」

「・・・っぐ、げほっ・・・！」

意外に近い場所で聞こえた、少年期特有のやや高めの声に、彼女は
思い切り食べ物を気管に詰まらせた。

咽たせいで涙で滲んだ視界を、何とか声のした方へと向ける。

彼は心配そうな顔で、自分を覗き込んでいた。ちようど何もなく安堵していた所だったのに、と少し恨みがましい視線になった気もする。

「……王子殿下。」

どことなく疲れを滲ませたユーリの声とは反対に、ラズフィスは実に麗しい笑みを浮かべた。

「殿下、もしや後宮を抜け出して来られたのですか？」

「お前に会いたかったんだ。ユーリはこの樹から離れられないだろう？だから余がこちらへ来たのだ。」

「この樹から……離れられないとは、どのような意味でございましょう。」

確かに自分は南地区から外へ出ることは適わないが、大樹から離れることは可能だ。

むしろ、この場に居ないことのほうが格段に多いだろう。

眉根を寄せたユーリに、ラズフィスは不思議そうに小首を傾げた。

「だって、お前はこの樹の精霊じゃないのか？」
(どこの世界に食い物を詰まらせて咽る精霊がいますか。)

思わず声に出して突っ込んでしまいそうになり、ユーリは拳を握り締めて耐えた。

溜め息を付きそうになる自分を叱咤し、笑顔を保つ努力をする。

そう、いくら王子殿下といえど、彼はまだ7つの子供なのだ。

空想を信じ、突拍子もないことを言っても許される年だ。

「御期待に沿えず申し訳ございませんが、私は南で働いております唯の下女にございます。」

「南？だが、南の者は皆不思議な言葉を話すではないか。お前は余の傍でよく聞く言葉を話しておるぞ。」

彼の言う不思議な言葉とは、恐らく訛りや下町言葉のことだろう。後宮の深くで教育を受ける王族にとっては、未知の言葉と言えるかもしれない。

「あれは言葉の訛りにございます、なかには私のように話す者もおりますよ。それに、この通り私は食物を食べねば生きてはいけませんぬゆえ、大樹の精にはなれぬかと。」

「そうか。お前はなんだか余の知る者達とは違う気がしたから、つきり人ではないのかと思ったのだ。すまなかったな。」

申し訳なさそうに眉を下げるラズフィスに、ユーリはほんの少し驚いた。

前回の遭遇時に思い切り泣いているところを見たせいか、彼は泣くか笑うかの印象しかなかった。

だが、本来はなかなか表情豊かな少年であるようだ。

好奇心が旺盛である年頃の子供らしく、ラズフィスの興味はユーリの手にする袋の中身へと移ったようだった。

「ユーリ、それはなんだ？初めて見るぞ。」

彼が指差したのは、レカシユの実だった。

それほど珍しい物でもなく、春先にはよく市場に出回る一般的な果物のはずだ。

料理人は王城で仕入れた分を分けてもらったと言っていたのだから、城でも普通に食しているのだろう。

まあ、王族の口に入る物と下働きが食べる物とでは、品質がまったく異なるには違いないが。

しかし、見た目がそう変わるわけでもないのだから、ラズフィスの反応には首を傾げざるを得ない。

「レカシユでございますが。ご存知ありませんか？」

「知っているが・・・、余の知るレカシユは白く柔らかい実に甘い香りがするものだ。このように茶色く硬いものは見たことがない。」

なるほど、とユーリは内心で頷いた。

硬い殻を持つこの果物は、割って食べるのに少し手間とコツがいる。王族の前には上がるレカシユは、きれいに殻を剥かれ、すぐに食べられる状態に出されているのだろう。

だから、あの白くまろく柔らかかな果物と、目の前の硬い殻に覆われた実が結びつかないのだ。

ユーリは皮袋の中からレカシユの実を一つ取り出すと、節に沿って指をのせて力を入れる。

パキリと音がして、表にひびが入ったのを確認し、裏返す。

同じように節に沿って力を加えると、硬い殻が割れ果汁とともに甘い匂いが漂う。

殻を全部剥いてしまえば、間違いなく彼の知るレカシユそのものだった。

「本当にレカシユだ。」

目を丸くして驚くラズフィスに、ユーリは笑みをこぼす。

王子といえども、こうして見ると普通の子供となら変わりない。

珍しい物を見るような視線でレカシユを見ていた彼は、急に真剣な顔になる。

「余にもやらせてくれ。」

「では、こちらを。」

大きめな実の方をラズフィスに渡すと、彼はユーリがやって見せたように殻に力を入れた。

しかし、力のかけ具合や場所が悪かったのか、殻の表面が歪むだけでひび一つ入らない。
暫く悪戦苦闘する彼を見守っていたユーリは、ラズフィスの手の中にある実の一点を指した。

「この節の部分に親指をあて、力を入れて殻が歪むようにされると良いかと存じます。」
「こうか？」

彼が幼い手で苦心しながら力を込めると、パキリと乾いた音がした。パツと顔を輝かせ、彼は実を裏返して同じように節の部分に指を宛がう。

今度はそれほど苦もなく殻にひびが入り、先ほどのレカシユより幾分か大きな果肉が転がり出てきた。
それを彼が戸惑いなく口にしたものだから、ユーリは少し慌てる。これが毒でも入っていたらどうするのだろうかと考えたが、それだけ彼が信頼してくれているのだと思うことにした。

「美味しいな！いつも食べる物より甘い気がする。」
「それはようございしました。」

白い頬を紅潮させて喜んでいたらラズフィスだったが、不意に視線を揺らして顔を曇らせる。
じっとレカシユの実を見つめて、何かを考え込んでいるようだった。それは、数日前にこの場所で見つけた、小さくなって泣いている彼に重なる。

「殿下？」

「このように、学べば、努力すれば、すぐにできるようになれば良いのに。」

それは、思わず零れ落ちたような、本当に小さな声だった。

時に突拍子もないことを考え、好奇心もあり、様々な感情を表出させる彼は、普通の少年と変わりなく思えた。

しかし、ふとした瞬間に思い知らされる。

彼が、王の子であるのだと。

王子である彼は、自分には想像がつかないほどの重圧があるのだろう。

なんと声をかければ良いだろうかと悩んでいるうちに、彼は自分で気持ちを切り替えたようだった。

顔を上げた時には、すでに元の少年の顔に戻っていた。

「余はそろそろ戻ることにする。お前が南の者なら、昼の休みであったのだろう。邪魔をしたな。」

「いえ、そのようなことは……。」

結局、かける言葉も見つかからないまま、ユーリは頭を振った。

先に幹を降り始めていたラズフィスは、何かを思い出したのか小さく声を上げて動きを止める。

急に振り返られたのに驚き、彼女は息を止めた。

彼のキラキラと光る瞳に、何故か嫌な予感がしてユーリの口元が引

き攣る。

「ユーリ。また、会えるだろうか。」

期待を込めた眼差しで見つめられ、ユーリは言葉に詰まる。

これで駄目だと言ったら、まるで自分が悪者のようではないか。冷や汗を流しながら、暫し視線を彷徨わせていた彼女は、やがて諦めたように溜め息をついた。

「縁がありましたら、おのずと会えましょう。」

自分の首を絞めることを自覚しながら、苦笑交じりに告げた言葉。返されたのは、あの麗しい笑顔だった。

小さくなっていく背中を見送り、ユーリはそっと目を伏せ太陽の少年を思う。

願わくは、彼の光が翳ることのないように。

彼女が囁いた言葉を、風が攫っていった。

合同際が近づくとつれ、街だけでなく、王城内も活気付いてきているようだった。

そんなある日、ユーリ達臨時雇用者が南門前の広場に集められた。祭り当日の勤務について、なにやら発表があるらしい。

近くにいる者同士で色々と憶測を話していると、下働きのまとめ役である女官が高らかに手を打ち鳴らした。

「今から合同際の日程や、注意しておかなければならないことについて説明します。心して聞きなさい。」

まずは、合同際の大まかな流れについて説明を受ける。半日休暇が与えられるため、臨時雇用者も祭りに参加できるのだそうだ。

自分達は幾つかの班に別れ、数字で識別されており、今回の休暇もその班毎に分けられているらしい。

ユーリの班は前半、つまり午前の内が休暇となる。

昼の鐘が鳴る頃に城へ戻り、残りの半数と交代するのだそうだ。

午後の方が絶対に賑わうのに、と同じ班の少女達は文句を言っていたが、ユーリとしては逆にありがたい。

朝早いうちに出かけて、薬草の種や野菜の苗を買い、人が増えてくる前に城に戻るのが理想的だ。

流通の中心である王都には、きっと珍しい種類の薬草や作物がたくさんあるだろう。

いま手持ちの現金はないが、持ってきた薬がまだ残っている。ついでに、王都に出てきた本来の目的も果たせば一石二鳥だ。

しかし、薬草の種ともなると、なかにはとんでもなく値が張るものもある。

薬を売った金で足りるだろうかと悩んでいると、城での給金を希望により一部前借りできるらしい。

そうなれば、購入できる物の幅もだいぶ増えるだろう。

行きたい店、欲しいものなど、頭の中でリストアップする。

自然とにやけてくる顔を、ユーリは意識して引き締める。

久しぶりの買い物に、自分も存外浮かれているようだった。

最後にスリに注意すること、門限の厳守について説明される。

賭博に手を出すなどの問題を起こさなければ、酒を飲むなどの行為は許されており、比較的規則は緩めのようなのだ。

「皆、節度ある態度で祭りに参加するように。以上、解散なさい。」

号令とともに戻るよう促され、それぞれ持ち場へと帰っていく。

ユーリ達も朝の日干しに遅れないよう、通いなれた洗濯場へ急いだ。

浮かれる城内や自分とは逆に、久しぶりに会った王子殿下はどことなく気落ちしているように見えた。

話をしても上の空で、時折遠くを眺めては物思いに耽っているようだ。

もともと、ユーリは話をするより聞く方が多かったため、自然と沈黙が増える。

とうとう黙り込んでしまったラズフィスは、枝から投げ出されている己の足先をじっと見つめていた。

さて、どうしたものかと考え込んでいると、彼は小さく息を吐いた。

「ユーリ、余は本当に王の子なのだろうか。」

彼の独白のような言葉に、ユーリは目を瞬く。

あまりにも答えが明白であるはずのことに、ラズフィスは思い悩んでいるようだった。

精霊の愛し子である、黄金を頂く者。

彼らは、王族の血筋からのみ誕生する。

ユーリは滅多に王都に出てくることはないため、今世陛下を拝見したことはない。

だが、やけに王族に詳しい知己に言わせると、第一王子は母である王妃よりも父である国王に良く似た面差しをしているらしかった。

「なぜ、そのように思われるのです？」

「……見よ。」

一言呟くと、ラズフィスは力を発動させるように、魔力を構成していく。

彼の金糸が風もなくふわりと浮き、額が淡く発光した。

だが、それ以上の変化が訪れることはなく、徐々に光は薄れていった。

ラズフィスは前に翳していた両手を握り締め、己の膝の上に置く。

「余は金の色を持ちながら、魔力を持たぬ落ちこぼれなのだ。」

祈るように背を折り、拳に額をつけて、彼ははらはらと涙を零した。

「ある者は、余を色だけの飾り物と呼んだ。魔力を持たぬ余は、本当は父上の子ではないのではと言う者もいる。」

「殿下……。」

「だが、もつとも許せなかったのは、母上を侮辱されたことだ。余が出来損ないであるのは、母が魔女の末裔であるせいだと言う！母上はあの者達よりよほどすばらしい力をお持ちなのに、余のせいで

恥を受けねばならぬのだ！・・・余は悔しい。」

ラズフィスの悲鳴とも思えるような叫びに、ユーリは絶句した。

ユーリは、彼がどれだけ努力し、学ぼうとしているかを知っていた。彼はたくさんの本を読み、教師からの指導を事細かに記録しているようだった。

魔術、歴史、政治とそれは多岐に渡った。

また、武術も学んでいるようで、彼の小さな手はあちこちにまめができていることを知っている。

そんな風に必死になっている少年へと向けられるには、あまりにも酷な言葉だった。

それに加え、自分のせいで大切な人に悪意を向けられるのだ。幼い少年にとって、どれほどの苦痛だっただろう。

彼が耐えてきた月日を思い、ユーリは静かに目を閉じた。

大樹の上での一時が終われば、彼は後宮へと帰り、ユーリは南地区へ戻る。

お互いの空間が交わることはなく、彼女は彼の姿を垣間見ることすら叶わない。

どれだけラズフィスが苦しんでいようと、泣いていようと、声をかけることもできない。

それほどに、彼と自分は様々な点で違いすぎる。

だが、そんな自分にも、一つだけ彼にしてやれることがある。

ラズフィスがただの少年であったなら、ユーリは迷わず手を差し伸べただろう。

しかし、彼は王の子なのだ。

彼の運命を変えろということ、すなわち、この国の未来を変えること。

己の行為によって、歴史が動く可能性が十分に在り得るのだ。それは、平穩を望む彼女にとって、何よりも忌避すべきことの一つだった。

（でも・・・もし、彼が、本当に変化を望むのならば、）

胸のうちに、迷いは残るけれど。

（ただ一度だけ、手を貸してみようか。）

できることなら、悲しむよりも、笑っていて欲しい。それが、縁ある者であるなら、尚更のこと。

浮かんだ思いに、彼女はこっそりと苦笑した。

己で思っていたよりも、自分は彼に絆されていたようだ。ゆっくりと瞼を開け、ユーリはラズフェイスへと声をかけた。

「殿下は素晴らしいほどの魔力をお持ちです。そして、それを王妃陛下は確信しておられるはず。」

「・・・魔術の教師にも、首を振られているのに、か？」

「はい、間違いございません。王妃陛下が《魔女の末裔》であればこそ。」

魔女の末裔とは、すなわち黒でありながら魔力を有する者の総称である。

本来、色によって属性が分かれる魔力だが、黒の者が魔力を得るとき、その力は属性を持たない。

全ての属性を司る光と、何ものにも属さぬ常闇は、本来ならば相容れることのない対極の魔力。

「真逆の存在であるがゆえに、分かることもありません。」

「母上に聞いたわけでもないのに、なぜそのような事が言えるのだ。母も、本当は余に失望しているかもしれない。」

頭を振るユーリに、ラズフェイスは訝しげな視線を向ける。

予想もしていなかったであろう彼女の言葉に、涙で濡れた新緑が驚きに見開かれるまで数秒もかからなかった。

「いいえ、私には分かるのです。なぜなら、私もまた、魔女の末裔だからです。」

どこか遠くで、ユーリは歯車の回る音を聞いた気がした。

かつて、膨大な魔力を持ち、常闇の魔女と呼ばれた女がいた。彼女は歴史の中に突如現れ、人々を大いに驚かせた。なぜならば、彼女は黒であった。

本来、魔力を宿さないはずの色を持ちながら、魔女は数々の逸話を残している。

彼女は一瞬で千里を駆け、魔を滅ぼし、その怒りは野を焼いたという。

しかし、一方で救いを求める者には手を差し伸べ、その慈しみは大地に実りを育んだ。

古来より、魔術とは己の魔力と、精霊の加護があつて初めて使用できるものであつた。

だが、彼女は精霊と交信することなく、己の魔力のみで力を振るつた。

異端であり、未知なる力を持つ魔女を、人々は恐れた。

やがて、彼の魔女は終の棲家を、現在のフェヴィリウスの果てにあつたとされる、緑豊かな森に定めた。

そこに、容易には人が近づけぬ結界をはり、瞬く間に見上げるほどの塔を建てた。

塔に訪れる者の願いを気まぐれに叶え、そうして千五百年余りが過ぎた頃、魔女の姿を見かける者はいなくなった。

人々は、彼女が死んだのだらうと噂し、彼の魔法の記憶は少しずつ薄れていった。

それから数百年の後、魔法の森の周囲を起点に不思議なことが起こり始めた。

時折、黒でありながら、僅かに魔力を持った子供が産まれるようになったのだ。

魔法のように強大な力を持つものは終ぞ産まれなかったが、彼女と同じようにどの属性にも当てはまらない異端の力を持っていた。

その力と彼の女を敬畏し、人々は彼らを《魔法の末裔》と呼んだ。

5 (前書き)

今回の話に、少しでも水害を連想させる文があります。苦痛を感じる方はご注意ください。そのような描写執筆に対し、ご不快に思われたら申し訳ありません。

「ユーリが・・・魔女の末裔？」

ラズフィスは丸くした目を瞬いて、啞然と呟いた。

「母上以外の末裔は始めて見た。」

「恐れ入ります。」

瞼を閉じた拍子に、眦から涙が零れ落ちた事すら頭にないようだった。

暫らくそうしてユーリを眺めていたが、時期に気まぎれに視線を逸らす。

「だが、その・・・、余が言うのもおかしいかも知れぬが、ユーリからは魔力を感じぬ。」

「魔女の末裔は精霊の加護なきゆえ、わずかな魔力しか持っておりません。」

「何を言う。母上は魔女の末裔だが、大臣どもに負けぬくらいの力をお持ちだ。」

「はい、つまりは王妃陛下が、末裔としては珍しいほどの魔力を持つておられると言うことです。」

代々、フェヴィリウスの王位は直系の血筋の中から、最も魔力があるものが継ぐ。

そのため、王の妃は側妃であれ、正妃であれ、魔力持ちが選ばれる。今代の王妃は傍系である、ヴァーニアスの公爵令嬢で、現国王の従姉妹に当たるそうだ。

幼い頃から供に居ることの多かった王は、ぜひ彼女を妃にと望み傍にあがることとなった。

当時、その婚姻に周りからは多くの反対意見がだされた。なぜならば、彼の令嬢が黒であったから。

黒が妃となった前例はなく、フェヴィリウスの王妃に相応しくないとされた。

反対意見を押しつけても、王が彼女を正妃にできたのは、王妃が黒としては異例なほどの魔力を持っていたからだだった。

それは、強い魔力をもって産まれる、王族の血ゆえの奇跡と言われている。

「本来、我々の持つ魔力はごく微量であるため、己すらも気づかぬ者も多うございます。」

そんなあるかなしかの魔力でありながら、ユーリがラズフィスの魔力に気づくことができたのは、偏に双方の魔力の相違によるものだ。

金は全ての属性を扱えるため、他属性の魔力と反発することは滅多にない。

だが、黒の魔力だけは別なのだ。

異端であるため、どの魔力とも一線を画する黒は、基本的に他属性とは相容れない。

先ほど、ラズフィスが魔力を構成した際、彼と接触していた右腕に微量な電気が流れるような感覚を受けた。

ついで、周りを飲み込む勢いで膨大な魔力が放たれる。

それが不安定に歪むと、瞬く間に彼の内へと戻り、霧散したのだ。

他の属性であれば気づく間もないであろう、本当に一瞬の出来事だった。

その時感じた、幼い子供が持つには、あまりに危険なほど強大な魔力。

暴発すれば、周りを巻き込んだ惨事になりかねない。

下手をしたら、彼自身の命すら危ういだろう。

コントロールできない魔力は、時に凶器に変わる。

彼は無意識にそれを感じ、魔術の発動を抑制している印象を受けた。

抑制された魔力は、彼の身の内に留まり、捌け口を探すように荒れ狂い乱れる。

そのため、力に不安定さをうみ、魔力がますます膨張し、調節することが難しくなる。

まさに悪循環であり、膨れ上がった魔力は、いわば決壊寸前の堤防だった。

自分でコントロールが難しいのであれば、強制的に外から対処するしかない。

しかし、それは彼が金を持つがゆえに難しい問題だった。他の属性であったなら、彼に魔力を流しても、その力は単に飲み込まれるだけに終わる。

流される魔力が黒である場合、力が混じり合うことはまずない。

だが、破裂寸前の所に反発した力を流すのだから、微妙な加減が必要となってくる。

彼の母である王妃ほどの魔力を持っていると、それは非常に難しいはずだ。

さらに、王妃は魔導師ではないのだから、繊細な魔力の構成は専門外だろう。

息子を救う力がありながら、目の前で苦しむ姿を見守るしかできない。

それは、どれほどの苦痛であつたらうか。

逆に、ユーリのように、もともと僅かな魔力しか持たない場合は話が早い。

繊細な調節もいらず、ただ彼に魔力を流せば良いのだ。

その力は彼の魔力に飲み込まれず、荒れた力を相殺しながら、やがて彼女の元に戻るだろう。

歪みが整えられた魔力は、その分だけ制御がしやすくなる。

あれだけ熱心に学んでいるラズフィスならば、すぐに己の力をコントロールできるようになるだろう。

それでも、彼のような強大な魔力、しかも暴発寸前の力を刺激するのは、大きな賭けだ。

ユーリの緊張を感じたのか、彼は驚きに呆けていた顔を引き締め、彼女に向き直った。

まるで物を習う生徒のような態度に、ユーリは僅かに笑みを浮かべる。

しかし、一つ息をついて気を沈め、自分もラズフィスに向き合うようにして座りなおした。

「力は貧弱なものではございますが、だからこそ、殿下にして差し上げられることがあります。」

「余のためにできること？」

「はい、しかし、良くお考えください。それをすれば、殿下の生は変わるでしょう。得ずとも良い苦勞を強いられ、多くのことに悩まされるかも知れません。あるいは、後悔なされることもあるでしょう。」

「・・・ああ。」

「それでも、なお、殿下が望まれるのであれば、私は殿下が魔力を得るための、手助けをいたしましょう。」

ラズフィスには同母の第3王女殿下や、異母姉がいるが、黄金を宿す彼は桁違いの魔力を有する。

彼が魔力を得れば、間違いなく王となるだろう。

人の数倍の苦勞があり、悩みがあり、唯人であれば煩わされることのない、厄介なものに向き合わねばならない。

それを背負って生きていく覚悟を、年端の行かない少年にさせるのは酷であると承知している。

だが、これは国の未来をも巻き込んだ賭けだ。

半端な気持ちで、実行することはできない。

ユーリは、真つ直ぐにラズフィスを見つめた。

「余は……。」

擦れた声で、彼は呟く。

新緑が伏せられ、影となり、やがて見えなくなった。

ラズフェイスは胸の前で拳を握り、強く握り締める。

口は固く結ばれ、頬に力が入っているのが分かる。

彼は事の意味をきちんと理解し、様々なことを考え込んでいるようだった。

やがて開かれた眼に迷いや、翳りは見当たらなかった。

（ああ、とうとう、彼は決めてしまったのだ。）

その眼差しを、彼女は少しだけ切なく思う。

「ユーリ、余に力を貸して欲しい。頼む。」

今度は、ユーリが目を瞑る。

彼は、自分で道を選んだ。

次は己が覚悟を決める番だった。

自分が、歴史に関わるという覚悟。

暫しの沈黙は、数秒であったかもしれないし、もっと長いものであったかもしれない。

彼女は瞼を開き、目の前の少年を見つめ、頭を垂れた。

「私わたくしで良ければ力となりましょう、ラズフィス殿下。」

未来の王となるものよ、と心の内だけで囁く。

彼は、ほんの少しの苦味を混ぜた顔で、だが安堵したような笑みを浮かべた。

「それで、余はどうすれば良いのだ。」

「私わたくしが魔力を整える手伝いをいたします。殿下はご自分の力を制御するよう、御心掛けください。」

「分かった。」

「では、僭越ではございますが、お手に触れても宜しいでしょうか。」

ラズフィスが頷いたのを確認して、ユーリは彼の右手を取った。

ところどころ硬くなっている掌は、小さくとも武術を学ぶ者の手だ。その手を両手で握り、彼女はラズフィスを見やる。

「今より、私の魔力を殿下へお流し致します。始め、少々痛みを伴うかもしれません、ご容赦ください。」

ひとこと言い置き、ユーリは目を瞑る。

集中して、少しずつ彼の右手から魔力を流す。

魔力が彼の中へと入る瞬間、電気が弾けるような音と、指先に小さな痛みを感じた。

ラズフィスの指が一瞬ピクリと反応したが、彼女の手の中からそれが引き抜かれることはなかった。

ゆっくりと、彼の全身を巡らせるイメージで力を構成する。

最初の様な痛みはないものの、時折魔力がぶつかり、爆ぜる様な音を立てた。

ラズフィスは懸命に魔力を追い、制御しようとしているらしく、目を閉じて眉間に皺を寄せている。

その額には、じんわりと汗が浮かんでいた。

それなりに時間をかけ、荒れる力を殺し、ユーリはようやく自分の魔力が手元に戻ってくるのを感じた。

最後に、彼の魔力が凧いでいるのを確認すると、彼女は静かに瞼を開く。

暗闇に慣れた目が、急激に飛び込んできた光に対応できず、反射的に目を細めた。

知らず知らず詰めていた息を吐き出して、彼女は握っていた小さな手を離す。

「いかがですか、殿下。ご気分の優れぬことはございませんか？」
「いや。むしろ、今までにないほど落ち着いている。」

膨大な魔力をコントロールするのに気力を注いだせいか、若干疲れ
たような表情を見せながらも、ラズフィスはユーリの問いに首を振
った。

彼は感覚を確かめるように、両手を開閉させたり、自分の魔力を探
るように瞼を閉じて集中したりしている。

「では、試しに魔術を使ってみてはいかがでしょう。始めは、殿下
の第2属性である、風の魔法が扱いやすいかと存じます。」

「そうだな、やってみる。」

一度息を吐いて、ラズフィスは構成を組んでいく。

どうやら、初歩魔法である風を吹かせる魔術のようだ。

黙って様子を眺めていたユーリだったが、彼が術を発動させるため
に込めた魔力量を感じて、慌てて声を上げる。

「ちょ……、どんだけ魔力込める気ですか！」

「え？」

だが静止には一歩遅く、ラズフィスが目を開けた瞬間、その場に強
風が吹き荒れた。

大樹の枝が音を立ててしなり、葉や小枝が風に耐え切れず舞う。

周りの木々で羽を休めていた野鳥達が、驚いて一斉に飛び去ってい

く。
慌てて彼が魔術を終了させると、辺りは恐ろしいほどの静寂に包まれた。

「……殿下。」

「……今まで、3倍以上の力を込めても、そよ風すら吹かせられなかったのだ。」

「3倍つて……。王城を破壊するおつもりですか。」

暫しの無言の後、どちらからともなく嘖き出した。

一頻り笑い、それぞれ己の身を叩いて、葉や枝を木の下へ落とす。

庭師や掃除担当の人間が悲鳴を上げそうだが、城が壊れるよりはましだろう。

「次はお気をつけ下さい。」

「そうだな、努力しよう。」

顔を上げたラズフィスは、今まで見たどの顔とも違う、穏やかな笑みを浮かべていた。

「ユーリ。余は……。私は、父上と母上の子だと、胸を張って良いのだな。」

「自信をお持ちください、殿下。」

噛み締めるようにゆっくり頷き、彼は城下を見下ろす。
晴れ渡った、染み入るような青い空を、一羽の鳥が羽ばたいていっ
た。

日が落ち、夜の帳が下りる頃、ようやく王城の使用人たちの仕事は終わる。

夕食を終え、手早く身を清めた後、各々割り当てられた部屋へと引き上げていく。

そんな中で、消灯前の下女部屋では、数日後に迫った祭りの話題が盛り上がりを見せていた。

「ねえ、祭りの日はどんな服を着てく？」

「どんなって、あたしは王都に出て来た時の服くらいしかないもの。」

「そうよね、王城の下働きの服の良い生地使ってるんだもん、やあね。」

「ああ、楽しみすぎて眠れなくなっちゃう。」

「えー、今から？気が早すぎよ。」

狭い部屋の中に二段ベッドが3つ並ぶだけの、実に簡素な部屋だが年頃の娘が集まればそれだけでいくらか華やぐ。ベッドの上で髪を梳いたり、シーツの皺を伸ばすなど、それぞれに

寝仕度を整えながら、彼女達は軽やかに笑った。

「私、一度でいいからパティールのお菓子を食べてみたかったの。」

「高級なお菓子も魅力だけど、あたしは屋台の食べ歩きがしたい。だって、国中の名物が味わえるって聞いたもん。」

「あら、アデルったら、この前夢の中でお腹一杯食べてたくせに。あたし、知ってるのよ。」

「やだ、何よそれ、夢でのことなんか覚えてないわよ！」

地方からの出稼ぎの身とはいえ、そこはやはり女性。

ファッションや甘味など、話題は尽きることなく移り変わっていく。お互いにからかいかい合い、一際高い笑い声が響いた瞬間、部屋の戸を叩く音がした。

彼女達は黙り込み、やや強張らせた顔を見合わせる。

消灯にはまだ間があったが、少しばかり煩くしすぎただろうか。隣の部屋からの苦情であったらと考えると、彼女達の腰も重い。

再度叩かれた扉に観念して、一番年嵩の娘が対応する。

戸口で暫らく対応していた彼女は、やがて困惑したような表情で戻ってきた。

「ユーリ、女官長様が呼んでる。」

「え、私？」

てっきり煩くした事を叱られるのだと思っていた彼女達は、皆同じような顔をしてユーリを振り返る。

「やだ、ユーリ。何か失敗でもしちゃったの？」

「心当たりはないんだけど……。」

「どつちにしろ、外で女官長様が待つてるから、早く行った方がいいよ。」

「なんか、気をつけてね。」

「馬鹿、何を気をつけるのよ。」

口々に慰めや励ましをくれる少女達に、ユーリは苦笑を返す。

春めいてきたとは言え、夜になればそれなりに冷えだろう。

上着を肩にかけ、同僚達の視線を背中に感じながら、彼女はドアを開け暗闇に身を滑り込ませる。

静かに戸を閉めて顔を上げると、下働きを纏めている女官長が廊下に佇んでいた。

「南地区、洗濯場配属の第8班、ユーリですね。」

「はい、そうです。」

「よろしい、私の後について来なさい。」

女官長は踵を返すと、足早に歩き出す。

足音を立てないよう気をつけながら、ユーリは彼女の後に続く。

人気のない廊下は何処となく薄暗く、寒々としている。

ユーリは小さく身を震わせ、上着に顔を埋めた。

暫らく歩き続けると、僅かに廊下が広くなり、置かれている調度品は質の良い物に変わる。

どうやら、いつの間にか管理者用の棟へ来たようだ。南地区でも最北に位置する管理棟は、普段なら滅多に足を踏み入れることはない。

王城に雇われる際に一度だけ面接で訪れたような気がするが、あの時は正直混乱していたため殆ど覚えていなかった。

廊下の両端には、下女部屋の質素な扉とは違い、重厚な木目の扉が並んでいる。

その中の一つに近づくと、女官長はユーリに待つよう声をかけて扉を叩いた。

「カーデュレン様、彼の者を連れてまいりました。」

ややあって、中からくぐもった男性の声が聞こえた。

女官長はユーリを振り返って頷くと、部屋に入るように促した。

「第3魔導師団団長があなたをお待ちです、失礼のないように。」

「あの、なぜその様な方が私をお呼びなのでしょう？」

「理由は直接ご本人にお聞きなさい。私は向いの部屋に居ます、話が終わったら声をかけなさい。」

「・・・分かりました。」

服の裾を音もなく翻し、女官長は廊下を横断すると部屋の中へと引き上げてしまった。

ユーリの気の重さに比例して、吐き出された息も重く、無人の廊下に響く。

自分の背後にある扉から、異様な空気がかもし出されている様で、

できることならすぐにでも下女部屋に引き返したかった。

この国には、各王族ごとにつく近衛の他に、10からなる騎士・魔導師の集団があり、特に第1から第3は王直属の部隊となる。

ユーリをここまで連れて来た女官長は、第3魔導師団の団長と言っていた。

つまり、王の部下である人物が、一枚の壁を隔てた向こうに居るということだ。

恨めしげに戸を睨みつけるが、それで中の人間が居なくなるわけでもない。

そして、いつまでも放置していて良い相手でもない。

(ああ、もう、本当に……。心底森に帰りたいんですけど。)

王都に来てから幾度となく思ったことだが、今日ほど切実に願ったことはない。

今、廊下に誰も人がいなくて幸いだっただ。

一人で空笑いをするユーリを見たら、誰もが一步距離を置いたことだろう。

肩を落とし、諦めの境地で扉を叩く。

「洗濯場配属、第8班のユーリでございます。」

「どうぞ、入ってください。」

一旦気を落ち着かせて、彼女は姿勢を整える。

前を見据えると、扉を開く手に力を入れた。

「失礼いたします。」

南地区の応接間であろうその部屋は、暖炉に火がくべられほど良く暖まっていた。

それなりの広さがある室内に、ゆったりと身を預けることのできるソファアが二つある。

真ん中にはしっかりとした作りのサイドテーブルが置かれ、存在を主張していた。

それとなく室内を見渡していたユーリは、視界の端に動く影を捉える。

ソファアに座っていた人物が立ち上がると同時に、ユーリは深く腰を折った。

「ユーリ殿、どうか顔を上げてください。」

かけられた言葉に、彼女は無礼にならない程度に視線を上げる。王族直属である証の白のローブは、第3魔導師団の色なのであろう。青紫で縁取られていた。

襟元には、団長を示す六芒星をモチーフに描かれた、ローブを止める金具が光っている。

艶やかな蒼銀の髪に、少し濃い飴色の瞳をした第3魔導師団長殿は、まだ年若い青年だった。

だが、魔導師の年齢を外見で判断するのは難しい。

魔術を扱う者はその魔力ゆえか、或は精霊の加護によるものかは分からないが、著しく老化が遅いのだ。

力を扱うに適した肉体を保持し、魔力の衰えと共に老いが始まる。

そのため、魔力の高い王族や魔導師は長寿が多いと聞く。

目の前の人物も、団長に登り詰めているくらいなのだから、見た目通りの年ではないだろう。

「廊下は寒かったですでしょう、どうぞこちらへ。」

穏やかな笑顔で手招かれ、ユーリは恐る恐る中央へと近づく。

促されて座ったソファは、体が沈みこむほど柔らかだ。

あまりの場違いさに、下女部屋の硬いベッドが恋しくなった。

「わざわざご足労をかけ、申し訳ありませんでした。本来ならこちらから赴くべきだと思ったのですが、女官長殿に止められました。」

魔導師団長の言葉に、ユーリは心の底から彼を止めてくれた女官長

に感謝した。

もしそんなことになっていたら、下女部屋では悲鳴を通り越して絶叫が響き渡っていたことだろう。

一般人である同室者の少女達が、魔導師団長の顔を知るはずもない。それでも、魔力持ちの、しかも明らかに身分が高いと思われる人物が現れたら、間違いなくパニックになったはずだ。

さらに、その人物が自分を訪ねてきたなどと発覚したら、その後は朝まで質問攻めだろう。

簡単に予想できる状態に、それだけで疲労感が増した。

「いえ、それよりも、私のような下女に、こういったご用件でございましょう。」

「まずは突然御呼び立てし、困惑させてしまいましたことをお詫びします。私は第3魔導師団長を務めております、フォルセデオ・カーデュレンと申します。」

彼の身分は部屋に入る前に聞いていたし、名は女官長が扉の前で呼びかけていたため、何となく知っていた。だが、魔導師団長の次の言葉に目を見開く。

「第1王子ラズフィス殿下の側仕えも兼任しております。」

同時に、彼のような人物が自分を訪ねてきた理由を悟る。突然の第1王子の魔力の開花に、周りの人間はひどく驚いたことだろう。

そして、何があったのかをラズフィスに尋ねたはずだ。

ユーリは特に口止めをしていたわけでもないのに、彼は素直に答えたのだらう。

ただ、周りの人間が自分を短時間で探し出したことは予想外だった。自分はラズフェイスに、南地区で働いているとことと、名前以外は何も教えていない。ユーリなどという名前は有り触れていたし、実際に同じ名前の同僚を何人か知っている。

魔力を頼りにするとしても、彼女の力はラズフェイスが気付かなかつたほど微弱なものだ。

熟練した魔導師ならまだしも、たくさんの人間に混じってしまえば、そう簡単に見つかるものではない。

ただの下働きを探すのに、上の人間がそこまでの時間も労力も割くとは思えなかった。

あと数日すれば合同際となり、それが終わればユーリの勤めも終わる。

自分を探し出される前に、容易に森に帰る事ができるだろうと、そう考えていたのに。

己の考えの甘さに、苦虫を噛み潰した心持になる。

さらに、未だに平穩にしがみ付こうとした自分に気付き苦笑した。

ラズフェイスに覚悟を強いておきながら、己のなんと臆病なことか。だが、長い年月をかけてユーリの中に育ってしまった恐れは、そう簡単に消えることはない。

心を決めたと思ったあの時、本当は覚悟なんてできていなかった。きつと、これからも諦めきれずに、みつともなく逃げ続けるのだ。

「よく、見つけれましたね。私は殿下に、名前しかお教えしていませんでした。」

「国王陛下と王妃陛下に頼み込まれては、必死になるしかないでしょう。」

「そこまでしていただくような人間ではありませんのに。」

「そんなことはありません。」

団長は真っ直ぐにユーリを見て、深く頭を垂れた。

「ユーリ殿、ラズフィス殿下の魔力を目覚めさせて頂いたこと、お二人に代わり感謝いたします。」

「カーデュレン団長様、頭を上げてください。その様にされては困ってしまいます。」

「いいえ、私からも、ぜひ礼を伝えたくったのです。最近の殿下はよくお笑いになる。今思えばあなたのおかげだったのでしよう。心よりお礼申し上げます。」

大樹でのラズフィスを思い出す。

彼はユーリのする、村や街の話に興味を示し、習慣に驚き、よく笑い声を上げていた。

精霊に愛される色に相応しく、日の光のように朗らかな笑みだった。彼の少年の苦悩が、あの僅かな時間だけでも取り払われていたのなら、これほど幸いなことはない。

「殿下はいま、どうされておいでですか？」

「今までの分を取り戻すべく、魔術の教師に術の教えを乞うておられます。」

「そうですね、それはようございまして。」

ラズフェイスなら、すぐにコツを掴み、息をするように魔術を使えるようになるだろう。

俯き小さく微笑むユーリを、いつの間にか頭を上げたカーデュレンが静かに見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1257ba/>

常闇の魔女

2012年1月9日20時50分発行